

南部史とアメリカ史の関係性を巡る一考察

— アンテベラム期の奴隷制擁護論を巡るヒストリオグラフィー —

朝 立 康太郎

はじめに

アメリカ南部史の泰斗 C・V・ウッドワードは、1953年に日本で行った講演において、南部史研究の同時代的及び世界史的な意義を次のように展望した。

南部は世界の他の国民と同様、戦敗、占領及び再建という悲劇的な経験を有しているが、これらは北部及び南部以外のアメリカの地区は未だ経験したことのないことである。南部はそれら世界中の大部分の人々と同じく農業経済もしくは原料経済のもつ苦境、即ちこれらの経済が高度に工業化された経済の支配する世界へ進出して行かなくてはならぬという苦しい立場を共にしているのである。挫折、不利、懲罰などが、程度の差こそあれ植民地社会においては何処でも付随するものであることは、よく知られていることであるが、誰もアメリカ人がそのような植民地の問題を経験したことがあるとか、またはそのような見解を理解し得るとか、考えはしなかったのである。

南部史は、北部や西部と比較するよりも、もっと南部と背景の似ている地域の歴史と比較考究した時に、収穫も多く、意義深くなるように考えられる¹⁾。

1) C・ヴァン・ウッドワード（清水博訳）「新しい観点より南部史を展望する」『アメリカ研究』13（1979年）、39-46頁。

敗戦国の日本がサンフランシスコ講和条約の締結を経て、戦後復興へと歩みつつある時期に行われたこの講演は、21世紀初頭の今日から読み返すと隔世の感が強い。日本に関するその後の状況変化もさることながら、アメリカ合衆国南部においても、1960年代後半以降にいわゆる「サン・ベルト地帯」の工業化が進み、今や「農業経済もしくは原料経済」に偏重したモノカルチャ的な産業構造では当然ありえない。そして何よりも、ウッドワード自身の思惑は別としても、この講演自体が、冷戦期における主に西側各国でのアメリカ研究への関心の高まりを背景としたものであり、この点で多分に冷戦下のアメリカ合衆国によるイデオロギー戦略の一環という性格を否応なく帯びていたことは想像に難くない。従って、植民地支配や敗戦によって低開発にある諸外国と南部の間に類似性を見出すことで、国内においては特殊と見なされた南部を当時の国際環境の中で一般化し、これを以って南部史研究の展望を広げようとする — そしてこれを通じて諸外国のアメリカ理解が深まり、相互の連帯・連携が強まることで、結果としてアメリカのヘゲモニーが強化されるという — 彼の議論は、多分に時代環境に制約されており、それが大きく様変わりした今日的視点からは、完全に古びてしまっているかに見える²⁾。

とはいえ、このように一見すると古色蒼然としたウッドワードの議論であっても、その中心には依然として一考に値する問題意識が潜んでいるように思われる。それは即ち、南部史をアメリカ合衆国の「正史」の埒外に置かれたある種の「裏面史」を捉え、であるからこそ南部史に「アメリカ史」の解釈を広げる可能性を見出している点、即ち彼が「南部史のアイロニー」と呼ぶ問題意識

2) 講演の冒頭では次のように述べている。「何となればアメリカの文化やその歴史はも早やアメリカ人だけの問題ではないからである。アメリカ研究の諸課程、特にアメリカ史研究の講座が最近十年間の間に世界各地に設置された。米国の歴史学者はこれらの講座を担当したり、またはそれらの発展をはかるために招かれている。さらに、多くの南部史家は最近このような構想の中に南部史の入る余地があるかどうかを考えさせられている。南部史家はボストンやニューヨークにとつてばかりでなく、オックスフォード、エディンバラ、メルボルン、ベルリン、東京及びニューデリーにも適切で興味のあることを述べなくてはならないから、それらを探し出すためにノートをすっかり調べなくてはならなかったのである。」同上、39頁。

である³⁾。上記の講演が行われた1950年代は、彼の主要著作が次々に発表された時期であったものの、アメリカ史研究の全体的な潮流としては、冷戦最盛期の中でルイス・ハーツに代表されるリベラル・コンセンサス史観が、アメリカ史の「正史」としての地位を誇っていた時期であった⁴⁾。「アメリカ人は一般に自分たちの体制や社会的取り決めが永続するものと思って」おり、「近代諸国民のなかで、南部人以外のアメリカ人は、歴史の連続性を保持しえた唯一の国民である」という考えが支配的であった当時において、「敗戦、占領及び再建という悲劇的な経験を有している」南部は、様々な歴史的断絶性に彩られた非アメリカ的な地域であり、従ってその歴史は冷戦期のアメリカ社会が欲望する「国家的物語」との同一化を難しくさせた⁵⁾。南部史は常に「アメリカ史」の外側に置かれるか、または「アメリカ史」の自画像を映し出す「鏡」として機能しているというのである。南部史とアメリカ史とをどのように接続することができるのか。またそれによってアメリカの「正史」を如何に書き換えることができるか。南部史家であるウッドワードの上記講演に、こうした問題意識を読み込むことは決して飛躍ではないだろう。

以上を踏まえ、本稿では、ウッドワードが唱えた「南部史のアイロニー」という視座を軸にしながら、アメリカ史研究における南部史研究の位置づけについて、その歴史的変遷を辿りつつ議論してみたい。具体的には、アンテベラム期の南部知識人を巡るヒストリオグラフィーを材料にしつつ、ウッドワードの問題意識が形成される経緯及びその後の展開について考察することが本稿の主眼となる。南部史を特徴づける「歴史的断絶性」について考える上で、人種奴隷制を巡る議論への注目が肝要であることに異論はないだろう。「自由」や

3) C. Vann Woodward, "The Irony of Southern History," *Journal of Southern History*, Vol. 19, No. 1 (Feb., 1953), pp. 3-19.

4) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America: An Interpretation of American Political Thought since the Revolution* (New York: Harcourt Brace and Co., 1955). [有賀貞訳『アメリカ自由主義の伝統』講談社学術文庫, 1994年]

5) C. V. Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* (New York: Oxford University Press, 1957, 2002), pp. 3-4. [清水博・有賀貞・長田豊臣訳『アメリカ人種差別の歴史』(福村出版, 1977年), 17頁]

「自立」という「アメリカ的価値」と決定的に対立する人種奴隷制は、植民地期以来の南部における政治・経済・社会・文化を規定した重要な「制度」であった。例えばトマス・ジェファソンが展望したように、独立・建国の当初はその将来的な消滅が見通され、実際に北部では次々と廃止が実現したものの、南部ではイギリスや北部の工業化に伴い、南北戦争前夜に至るまでむしろ拡大傾向を強めていったことはよく知られた事実である。然して、自由州と奴隷州の対立構図が出来上がり、南部は奴隷制と一体化した自らの地域的アイデンティティを確立し、それがやがて南北戦争という未曾有の内戦を引き起こすことになる。本稿で注目する南部知識人は、こうした奴隷制を根本とするアンテベラム期南部の地域的アイデンティティについて、その言語化に多大な貢献を成した人々であり、従ってリベラル・コンセンサス史観においても、彼らの言論は南部の「非アメリカ」的な性格を説明する格好の材料とされてきた⁶⁾。とはいえ、後述するように、20世紀末よりグローバル・ヒストリーの知的潮流が強まる中で、アメリカ史の叙述スタイルも様々な変遷を辿り、その渦中で、南部知識人の歴史的評価もいくつかの変化を経験することになる。本稿では、そうした南部知識人を巡るヒストリオグラフィーを概観することを通じて、南部史とアメリカ史の関係性について考察し、両者の接続のあり方について議論してみたい。

第1節：「南部史」の始まりとその特質

本節では、次節以降での議論の前提として、広く「南部史」の学問的な領域が形成される経緯を概観し、その特質を簡単に整理しておこう。

第32代大統領フランクリン・ローズヴェルト大統領は、1938年に発表した『南部の経済状態に関する報告書』において次のように述べている。「南部は現在のわが国における第一の経済問題である — それは南部単独の問題ではなく、国家の問題なのだ。我々は総じて国内における経済的な不均衡の問題を抱

6) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*, chapter 6.

えているが、それはまさしく南部の状況に由来すると考えて間違いない⁷⁾。」

周知のように、南北戦争以後、敗北した南部は国内の後進地域という地位に長く苦しむことになる。戦前からの綿花を中心とした農業は言うまでもなく、20世紀転換期に興った紡績、木材、鉄鋼、化学、石油、天然ガスなどの工業化や商業化という大きな波も、結局のところ地域的繁栄には結実せず、北部との経済的格差は拡大する一方であった。それどころか、南北戦争での敗北以来、排外的な感情と対内的なコンフォーミティの傾向を強めていた南部では、急速な商工業化による生活変化への戸惑いや社会不安の増大が、主に第一次世界大戦を契機としたKKKの復活、禁酒運動、宗教的原理主義、リンチ、人種隔離の完成など、様々な形で露出する始末であった。先の『南部の経済状態に関する報告書』では、天然資源や気候条件、また豊富な労働人口に南部の潜在的な発展可能性を見出しているものの、現状として、綿作モノカルチャに依存する脆弱な産業構造を背景にした貧困が広がり、消費物資の大半を北部に依存することを強いられる南部は、そうした経済発展の潜在的可能性に背を向け、「国内における経済的な不均衡の問題」を作り出す — 従って、アメリカ国内にあってアメリカではない — 後進地域として見なされていたのである。第一次世界大戦を経て、国際社会における存在感が強まっていた当時において、南部の状況を如何に改善していくのかという問題は、単に大恐慌からの国内経済の回復という問題に留まらず、当時の国際環境に応じたナショナル・アイデンティティの構築を目指す上でも、目を背けることのできない重要な「国家の問題」となっていたといえよう⁸⁾。

とはいえ、こうした南部が直面する厳しい現実への認識が広まる一方で、

7) U. S. National Emergency Council, Report on Economic Conditions of the South. (1938), p. 1.

8) こうした時代状況のなか、1934年に南部歴史協会(The Southern Historical Association)が設立されていることも付言しておこう。機関紙*Journal of Southern History*を発行し、一地域史学会としては現在もアメリカ合衆国最大規模である同協会は、「南部史に対して単なる記念というよりも調査研究のアプローチを奨励する責務を負っている」と謳っている。このことから、ある種の南部の後進性に対する危機感は南部の学術界隈においても共有されていたと推察できる。

実際の南部では、19世紀以来の「プランテーション神話」と呼ばれるロマンティックな自画像が、20世紀初頭においても依然として根強く存在した⁹⁾。とりわけ、1900年代から20年代にかけての時代は、1890年代に人民党運動へと展開した農民運動が概ね収束し、デマゴーク政治家によるブルボンの支配の下で、過剰に美化された「失われた大義」が人々への訴求力を強めた時期でもあった。貴族的で洗練された教養と美德を身につけ、上品で優美で名誉を重んじる、ノブレス・オブリージュを備えた白人紳士淑女の世界という南部のイメージは、1914年に公開され興行的成功を収めたD・W・グリフィスの『国民の創生』にも看取できる。そして、こうした「プランテーション神話」を、学術的に裏付ける役割を果たしたのが、しばしば南部史家の嚆矢に位置付けられるU・B・フィリップスの一連の研究成果であった¹⁰⁾。奴隷制プランテーションの維持・管理を、経済的な合理性や効率性よりも、プランター自身やその家系の地域コミュニティにおける社会的地位や温情主義的人物評価の追求手段として性格付け、南部全体を支配階層の白人と被支配階層の黒人によって構成される社会体制(biracialism)と理解するフィリップスの議論は、確かに「プランテーション神話」に歴史的根拠を与えるものであった。しかしながら他方で、フィリップスの描くプランター像、すなわち社会的地位や政治権力の保全に執着する中で、経済性を欠いた人種奴隷制を棄却できないプランターの姿は、

9) アメリカ文学史上、南北戦争・再建期以後に盛んとなる地方色豊かで懐古的な南部作家の作品群も「プランテーション神話」が描く南部像の広がりにも貢献したと考えられている。アーウィン・ラッセル(1853-79)、シャールウッド・ボナー(1849-83)、メアリー・マーフリー(1850-1922)、ジェイムズ・アレン(1849-1925)、ジョエル・C・ハリス(1848-1908)、トマス・ペイジ(1853-1922)などはその代表的な作家である。

10) Ulrich B. Phillips, *Georgia and States Rights: A Study of the Political History of Georgia from the Revolution to the Civil War, With Particular Regard to Federal Relations* (Washington: Government Printing Office, 1902); *A History of Transportation in the Eastern Cotton Belt: To 1860* (New York: Columbia University Press, 1908); *The Life of Robert Toombs* (New York: McMillan Company, 1913); *American Negro Slavery: A Survey of the Supply, Employment, and Control of Negro Labor, as Determined by the Plantation Regime* (New York: D. Appleton and Company, 1918).

先述した20世紀初頭における南部の経済的苦境の原因論としても機能したともいえよう。経済的な合理性や効率性の追求が「アメリカ的価値」であるとするならば、その拒否や否定にこそ南部的価値が存在するという理解を、「プランテーション神話」やフィリップスの議論に見出すことができる。

こうした南部の特殊性を巡る議論は、1930年代以降、ジョン・クロウ・ランサム、ドナルド・デイヴィッドソン、アラン・テイトなど「南部文芸復興 (Southern Renaissance)」の一翼を担った「サザン・アグレリアンズ」によってより一層厚みを増すことになる¹¹⁾。彼らは、1920年代にC・ビアードらの革新主義史家がアメリカ史像を描き出す上で用いた「キャピタリズム」対「アグレリアニズム」の二分法的な概念を、北部と南部の地域的なコントラストを描く形で援用し、「プランテーション神話」に代わる「アグレリアン神話」を唱えた。即ち、「インダストリアニズムの北部」と「アグレリアニズムの南部」という対立概念を設定した上で、工業化や都市化が進む北部こそ文化的不毛の地であって、豊かな自然に囲まれ、歴史的に堆積した土着的な（人種関係を含めた）社会的諸関係が取り結ばれる南部は、人間的価値が尊重されると同時に、人間らしい生活が残っているアメリカで唯一の地域に他ならないと主張したのである¹²⁾。1910年代末のH・L・メンケンから始まった南部批判は、1920年代に入るとフランク・タネンバウムやハワード・オードムなどの学術的により実証性を帯びたものへと広がりを見せつつあった¹³⁾。「アグレリアン神話」は、「プランテーション神話」の虚偽的性格を暴き、南部社会の暗部に批判的眼差しを

11) ジョン・クロウ・ランサム (1888-1974)、ドナルド・デイヴィッドソン (1893-1968)、アラン・テイト (1899-1979)、ロバート・ペン・ウォーレン (1905-1989) など、ヴァンダービルド大学に拠点に活動した総勢 12 人の南部知識人グループの名称。彼らは 1930 年に南部文学者としての声明をそれぞれ発表し、これは 1936 年に *I'll Take my Stand* という論文集として出版された。

12) 長田豊臣『The Central Theme of Southern History — 南部出身の南部史家の南部認識を巡って —』『アメリカ研究』13 (1979 年)、33-45 頁。

13) Frank Tannenbaum, *Darker Phases of the New South* (New York: Knickerbocker Press, 1924); Howard Odum, *An Approach to Public Welfare and Social Work* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1926).

向ける議論が勢いを増す中で、南部の特殊性について「プランテーション神話」に代わる、より文学的な深みを備えた自己肯定感を当時の南部社会（白人社会）にもたらしたといえよう。

これに対して、同じ南部人でありながら、ジャーナリスティックな手法を通じて「プランテーション神話」を徹底的に解体したのがW・J・キャッシュであった¹⁴⁾。同時代の「南部文芸復興」の中で、ウィリアム・フォークナーやトマス・ウルフなどが「プランテーション神話」を彩ったロマンティックな感傷性や美化志向を拭い去るリアリスティックな作品を次々に発表していたが、キャッシュが『南部の精神』（1941年）で試みたことは、当時の文学や評論で生々しく描かれ始めた南部社会および南部白人の根底にあるエートスを精緻に言語化することであったといえよう¹⁵⁾。彼が「原始ドーリア式因習（Proto-Dorian convention）」という独特の術語を用いて南部白人の思考や行動のパターンと、その歴史的な一貫性を強調したことはよく知られている。従来の「プランテーション神話」は限定的な地域の特権階層が営む生活を誇張して南部全体に一般化したものに過ぎず、南部の大部分の実態は、フロンティア性の高い生活環境の下で、暴力性を帯びた個人主義を核としつつも非現実的でロマンティシズムと享楽主義に傾きやすい人々が「中心的人間（the man at the center）」となって展開する反復の歴史であった。すなわち、19世紀前半には自然環境と

14) ノースカロライナ州の比較的裕福なスコッチ・アイリッシュ系家庭に生まれたキャッシュは、ごく自然な「ブルボン」としての自意識を育む一方で、青年期には南部社会の商工業化に伴う変化とその歪みの噴出を目撃し、やがてメンケンに代表される南部への批判的眼差しに強く感化されることになる。心酔するメンケンに認められ、1929年から『アメリカン・マーキュリー』に南部社会を批判する論文を寄稿し始めたキャッシュであったが、井出義光によれば、「自分の生まれ故郷を嫌うというアメリカ共通のこの傾向は、特に南部の知識人や作家に強烈であった。」しかしながら、「キャッシュにしろ、あるいは（トマス）ウルフ、（クラレンス）ケイソン、またはフォークナーにしろ、彼らが最後まで持っていた感情は基本的に南部的であった。幼年の頃植え付けられた彼らの南部に対する愛情は、彼らの新しい経験やアイデアに触れて軋轢を生んだ。彼らの南部に対する嫌悪と批判は、この軋轢の生む不安に対する一種の反応」であったという。井出義光「苦悩する知識人—ウィルバー・J・キャッシュと「新南部」—」『アメリカ研究』3（1969年）、69-89頁。

15) W. J. Cash, *The Mind of the South* (1941, reprint New York: Vintage Books, 1991).

してのフロンティアが、19世紀後半には敗戦によるフロンティアが、そして20世紀転換には工業化の波というフロンティアが、繰り返し「中心的人間」たる南部白人の眼前に広がり、彼らはそれぞれの場面において、一方で互いに生き馬の目を抜く激しい競争に晒されつつも、他方で「原始ドーリア式因習」によって階級分化を回避し、人種の連帯感を保持し続けるというパターンを反復したのであった¹⁶⁾。キャッシュによれば、絶えずフロンティアとの格闘を余儀なくされた南部には、真の貴族制が育まれる時間的余裕などあるはずもなく、実際のところ「外から美しい衣装を羽織った」に過ぎない自称貴族が、「野蛮人の理想」を追求する現実が広がっていたのであった。

ともあれ、ここで改めて確認しておきたいことは、「プランテーション神話」を結果的に補強したフィリップスが南部の本質とした人種主義体制 (biracialism) にせよ、「南部文芸復興」の中で出現した「アグレリアン神話」にせよ、さらには南部人キャッシュの自己批判的な術語である「原始ドーリア式因習」にせよ、それぞれの南部理解は、表面的には互いに対立するように見えて、実のところ南部の特異性や質的な連続性という点で主張を同じくしていることである。換言すれば、南部史を巡る語りは、20世紀前半にその本格的な始まりを迎えるにあたって、中心的なアメリカ合衆国の発展や進歩から隔絶された南部という現状認識を前提にして、その特殊性を如何なる文脈によって説明図けるのかという問題意識に支配されていたといえる。

やがてリベラル・コンセンサス史観が支配的になる1950年代の到来を見据える中で、国家的物語としてのアメリカ史は、南部史の内に見いだされるものではないという認識が主流をなしていたことは疑いようのない事実と思われる。そのことは、メイフラワー誓約を起源とする多分に創作的な「ピューリタン建国神話」が、19世紀半ばの南北戦争と奴隷制廃止を通じてアメリカ史の「正

16) W・J・キャッシュの人物像やその研究業績に関する議論に関しては、次の文献に詳しい。James C. Cobb, "Does Mind No Longer Matter?: The South, the Nation, and The Mind of the South, 1941-1991," *The Journal of Southern History*, Vol. LVII, No. 4, November 1991, pp. 681-718.

史」の地位に上り、20世紀転換期にアメリカ合衆国の国際的プレゼンスが上昇することで、その地位を不動のものにしたことが物語っている¹⁷⁾。1936年にハワード・オードムが指摘しているように、南部は「経済において本質的に植民地的」であり、世界経済における後進国の地位に例えられていたのが当時の現実であった¹⁸⁾。南部史は、アメリカ史の「裏面史」であり、アメリカの「本質」から最も遠い「辺境」の歴史と見なされていたのである¹⁹⁾。南部をあくまでもアメリカ合衆国における「辺境」や「外部」と位置づけ、そうした特異性について様々な角度から分析することに注力する限り、南部史をアメリカ史と接続し、両者の総合を図るという発想は望むべくもなかったといえよう。

第2節：「南部史」と「アメリカ史」の接近

ルイス・ハーツは、アメリカ史における自由主義的伝統の一貫性を議論する際、その数少ない反証材料の一つとして、アンテベラム期の南部知識人を取り上げている。彼らが、南部奴隷制社会をヨーロッパ旧世界における封建制社会になぞらえて積極的に擁護する議論は、その論理的帰結として、アメリカ独立革命の理念を正面から否定したからである。ハーツにとって、依存や不自由、支配や服従を積極的に擁護する南部知識人の言論とその思想は、明らかに自由主義というアメリカ的価値を毀損するものであり、従ってその歴史的理解は、自らのリベラル・コンセンサス史観を打ち立てる上で極めて重要な問題となったのである²⁰⁾。

17) 「ピューリタン建国神話」がアメリカ史における「正史」の地位を得る経緯については、次の文献に詳しい。大西直樹『ビルグリム・ファーザーズという神話 ― 作られた「アメリカ建国」』講談社選書メチエ、1998年。

18) Howard W. Odum, *Southern Regions of the United States* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1936), p.

19) また、このような、本稿冒頭で紹介したウッドワードの議論とも相通じる南部史を巡る理解について、例えば長田豊臣は、それが「南部出身の南部史家」に共通する特徴であると指摘している。長田豊臣「The Central Theme of Southern History ― 南部出身の南部史家の南部認識を巡って ―」『アメリカ研究』13（1979年）、33-45頁。

然してハーツは、南部知識人が現実的に拠って立つ奴隷制度と、思想的に拠って立つ封建制度との根本的な相違を重視し、後者が歴史的に不在であったアメリカ合衆国において、南部知識人の言論は、「欺瞞に満ちた自由主義を、より欺瞞に満ちた封建主義と交換した」に過ぎないと断じた。彼によれば、「アメリカはロックの合理主義的理論をバークの伝統主義的現実に変形した」世界史上に稀な国家であり、従って「保守主義をもって自由主義を論駁しようとした者は、自由主義を論駁する代わりに、彼自身を論駁していることに気付く」ことになるのであった。このように、アンテベラム期における南部知識人の言論や思想は、悲劇的なまでの「自己矛盾」を抱えているが故に、同時代の論争相手である奴隷制廃止論者だけではなく、「アメリカの全思想史を通じ」て、「漠然とただ信じようとしないう無視という拒否」を受けることになった²¹⁾。

南北戦争時代の政治思想に象徴されているものは、アメリカ自由主義の理念の弱さではなく、その強さ、その活力、そのアメリカ精神に対する全面的な支配力である。南部人がロックの把握力から脱しようと努め、そのために耐えた奇妙な苦悩、あるいは全国民が彼らの努力を冷遇したその仕方等々は、その理念の力強さを永久に証拠立てるものである。「偉大な保守的反動」が一国民の精神に何らの衝撃を与えることなく死滅するというようなことは西洋の歴史ではありふれたことではない²²⁾。

ハーツは、南部知識人の言論と思想が、自由主義に支配された「一国民の精神に何らの衝撃を与えることなく死滅した」ことは、むしろ自由主義という「理念の力強さを永久に証拠立てるものである」と結論付けた。換言すれば、アンテベラム期の南部知識人は、アメリカの自画像をより明確に映し出す「鏡」となったというのである。こうしたハーツの議論を、南部史をアメリカ

20) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*, chapter 6. [(有賀貞訳)『アメリカ自由主義の伝統』, 第6章]

21) *Ibid.*, pp. 147, 151. [同上, 207, 212 頁]

22) *Ibid.*, pp. 176-77. [同上, 244 頁]

史における「正史」の外部に位置付けようとする前節での議論の延長線上に捉えることは容易いかもしれない²³⁾。

とはいえ、ここで留意しておきたいことは、南部知識人が言論活動を展開したアンテベラム期を「反動啓蒙期」と呼ぶハーツが、この時期を「アメリカが自己から脱却しかけた時期であり、生まれながらに知っていた自由の公式を何らかの形で客観的に眺めた時期」とした上で、「アメリカ政治思想における想像力に満ちた時期」と理解している点である。ハーツにしてみれば、歴史的に封建制を欠いたアメリカにおいて、真の意味での「反動」も「保守」もあり得ず、従って南部知識人が唱える「反動的啓蒙の物語」は「白昼夢のようなもの」であった。しかしながら、むしろそれ故に、自己矛盾に満ちた南部知識人の存在こそが、アメリカの自由主義的伝統を巡る「逆説」を可視化させ、アメリカの世界史的意義を補完する役割を果たしているとする彼の議論は、南部史とアメリカ史の接続を巡る、従来とは異なった新しいモデルを提示しているように思われる。即ち、南部史はアメリカ史の外部でもなければ「裏面史」でもなく、アメリカの「本質」を議論する上での不可欠なピースと位置付けるアメリカ史像の理解である²⁴⁾。

1950年代に出現するこうした議論の背後に、冷戦最盛期のイデオロギー環境を看取するとこは難しくない。第二次世界大戦を経て、全体主義と人種主義の撲滅が東西陣営の違いを超えた共通課題となっていた当時において、南部に深刻な人種問題と強力な一党支配体制を抱えるアメリカ合衆国が、自由主義陣営の旗手として自己規定を強めるためには、従来のように南部をアメリカ史の「外部」として扱うのではなく、内部に取り込んだ上で総合的な国家的物語を創り上げることが必要とされたといえよう。もちろん、ハーツの議論がその試みに全く成功しているとは言えない。本稿冒頭で紹介したウッドワードの議論のように、アメリカ史の「裏面史」として扱われてきた南部史を、一国史の枠組み

23) Louis Hartz, "The Reactionary Enlightenment: Southern Political Thought before the Civil War," *The Western Political Quarterly*, vol. 5, no. 1 (1952), pp. 31-50.

24) Louis Hartz, *The Liberal Tradition in America*, chapter 6. [(有賀貞訳)『アメリカ自由主義の伝統』, 第6章]

を超えて近代世界史に直接繋ぐ回路を模索することも、そうした試み一つと捉えることもできる。いずれにせよ、ここで強調しておきたいことは、南部史をそれ単体で自己完結的に物語るよりも、アメリカ史や近代世界史といった、その外側の文脈と接続する方法を模索しようとする問題意識の存在であり、それが時代環境の要請によって出現している点である。

例えば、アンテベラム末期に北部の「自由な社会」を痛烈に批判した南部知識人の急進派ジョージ・フィッツヒューの著作が、1960年に再編出版された際、その編集と序文執筆を担当したウッドワードは次のように述べている。

しかしながら、古い世代がフィッツヒューの思想の意義について評価した時点から100年という時間の経過によって、その見方は一変することになった。高度に個人主義的な社会の成功は、この国においてこれまでと同じようにはや永続的ではないように思われる。国外においても、成長が続くことで、必然的にあらゆる形態の奴隷制が消滅するとはもはや考えられてはいない。歴史の趨勢は絶えず変化している。数百万に上る世界中の人々が、安全保障を求め、自由を放棄し、主人を探している。それはフィッツヒューが推奨した社会主義の一形態でもなければ、彼が擁護した奴隷制でもない。それはむしろ彼が恐れた別の種類のシステム〔自由な社会〕であり、そのことは彼の予言が言い当てている。社会主義が忌み嫌われる社会においてさえ、大量生産、大衆組織、大衆文化が、彼の洞察を、個人主義的な旧来の秩序においてよりも、より一層有意義なものにしているのである²⁵⁾。

第二次世界大戦期から続く好景気によって物質的に「豊かな社会」（ガルブレイス）が実現した1950年代は、一方で冷戦最盛期におけるリベラル・コンセンサスの時代でありながら、他方で全体主義に似た画一的な大衆社会に対する閉塞感が蔓延した時代でもあった²⁶⁾。大衆消費社会が本格的に到来する中、テ

25) George Fitzhugh, *Cannibals All!: Or Slaves without Masters* (C. Vann Woodward ed., Cambridge: Harvard University Press, 1960), pp. vii-viii.

レビの普及が単なる商品広告に留まらない人々の生活様式の隅々に渡る情報とイメージの画一化を促し、政治的にも米ソ対立の激化やマッカーシイズムの跳梁によって、アメリカ社会の大勢順応的な雰囲気は益々高まっていった。しかも、そうした内面的自立性よりも「他人志向」的な傾向を強める人々が、デヴィッド・リースマンが指摘するように、とりわけ高学歴の「新中産階級」に多かったという事実は、「コンセンサス時代」に潜む疎外状況を特徴づけると同時に、自由主義社会の「逆説」を如実に物語っていた²⁷⁾。

フィッツヒューは、奴隷制をその根本原理において肯定し、奴隷制社会を社会主義的なユートピアに模して称賛したことで知られるが、その論証材料としてしばしば言及したのが、北部の「自由な社会」における人間の疎外状況であった²⁸⁾。ウッドワードによれば、フィッツヒューの「自由の逆説」を巡る洞察は、彼がその主張を唱えた当時から無視され続けてきたものの、「彼の予言が言い当てている」現実が約100年後のアメリカ社会の中に否応なく見言い出せる中で、その評価も見直される機運が高まってきているのであった。もちろんこのことは、奴隷制擁護論を唱えたフィッツヒューの言論を全面肯定する可能性を探ることを単純に意味しているのではない。そうではなくて、17世紀末から植民地全体に広がった奴隷制度が、独立・建国を境に南部に局所化し、そこで人種主義が刻印された特殊な政治文化や社会経済が生み出されていった経緯をアメリカ史の枠組みの中に総合化すること、及びそうした総合的な「アメリカ史」の視点からアメリカの「現在」との関係性を捉え直すことが求められているというのが、ウッドワードの主張の要点である。ここにも、先のハーツ

26) John Kenneth Galbraith, *The Affluent Society* (1958). [鈴木哲太郎訳『豊かな社会：決定版』(岩波書店、2006年)；Daniel Bell, *The End of Ideology: on the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties* (1960). [岡田直之訳『イデオロギーの終焉—1950年代における政治思想の涸渇について—』(東京創元社、1969年、新版1980年)；Daniel Boorstin, *The Image: A Guide to Pseudo-events in America* (1962). [星野郁美・後藤彦訳『幻影の時代—マスコミが製造する事実—』(東京創元社、1964年)]

27) David Riesman, *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character* (1950). [加藤秀俊訳『孤独な群衆』(みすず書房、1964年)]

28) George Fitzhugh, *Sociology for the South; Or, The Failure of Free Society* (1854).

と同様の南部史とアメリカ史の関係性を巡る新たな認識が見て取れる。

こうした時代環境と歴史解釈のダイナミックな関係は、アメリカ社会が急速な社会変革と混乱に見舞われた1960年代に入ると、南部史とアメリカ史の接近や両者の総合化をさらに後押しすることになる。公民権運動の高揚、ヴェトナム戦争の泥沼化と反戦運動の拡大、貧困問題の顕在化やカウンター・カルチャーの出現、北部大都市を中心とした人種暴動の頻発やブラック・パワー運動の出現など、従来の「リベラル・コンセンサス」に支えられたアメリカ社会がまるで嘘であったかのような現実が次々に出現する中で、人々の「アメリカ史」の見え方も様変わりすることになった²⁹⁾。とりわけこの時代は、公民権法（1964年）や投票権法（1965年）による人種隔離政策の撤廃と権利保障の実現に加え、「サン・ベルト」の出現に象徴される工業化の進展によって「南部のアメリカ化」が実現したといわれる反面、北部に潜む様々な人種差別や貧困問題に注目が集まり、大都市では人種暴動も頻発するなど、「偉大な社会」の建設が挫折していく中で、「アメリカの南部化」が指摘された時代であった。換言すれば、南部はもはやアメリカの「外部」ではなく、北部や西部と同様にアメリカを構成する一個の地域的なフル・メンバーとして、また変革に晒されるアメリカの現実を解明する重要なピースとして、その存在感を増したということになる。

このことは、一見すると冒頭で紹介したウッドワードの議論、即ち「南部史のアイロニー」が有効性を失う事態が到来したかに思われる。かつては南部にその所在が限定された「悲劇的な経験」が、今や「北部及び南部以外のアメリカの地区」にも共有されている以上、南部にのみ歴史的断絶性を見言い出し、それを近代世界史の中で一般化することで、アメリカ史の解釈可能性を拡張するという議論は、もはや説得力を持続できないかに見えるだろう。多くの学説がそうであるように、「南部史のアイロニー」もまた特定の時代性が刻印され

29) 例えば独立革命・建国期研究では、従来の自由主義思想を重視する傾向からバーナード・ベイリンにおける共和主義的解釈の出現や、南北戦争・再建期におけるリヴィジョニストなど、1960年代には初期アメリカ史に関する新たな解釈が出現した。

たものなのかもしれない。しかしながら、ここで留意したいことは、南部史が「アイロニー」としての効果を失ったことで、むしろ南部史の観点からアメリカ史全体を捉え直す試みやその成果がより説得力を増すことになった点であろう。実際、次節で詳述するように、1960年代半ば以降には、人種奴隷制やそれを擁護する南部知識人の言論など、これまで南部の特殊性と捉えられがちであった対象を、各時代のアメリカ史像を解き明かす素材として取り上げ、より広範な史的文脈と地理的視野の中で捉えていこうとする研究成果が次々に現れることになる。いうなれば、「南部史のアイロニー」という表現を通じてウッドワードが意図した南部史の可能性の拡張は、時代環境の変化によりその本来的な意味が耐用年数を過ぎた後になって初めて実現するという、まさにアイロニカルな展開が見出せるのである。

第3節：「南部史」と「アメリカ史」の新たな接続を巡って

これまでの議論を改めて整理しておくと、ごく大雑把に言って1950年代までの南部は、「バクス・アメリカーナ」の日陰に位置付けられた国内の「後進地域」であり、従って南部史に関してはアメリカ史の中での「異質性」や「特殊性」こそが―それをアグレリアン神話のように擁護するにせよ、キャッシュやハーツのように批判するにせよ―議論の対象となってきた。もちろんそれは、本稿で注目するアンテベラム期の南部知識人に関しても例外ではない。彼らが唱える奴隷制擁護論は、同時代の北部アボリショニストが唱えた奴隷制廃止論との関係において「異質」や「特殊」であり、それ故、先述したハーツの議論がそうであったように、奴隷制擁護論に関する研究は、総じて「アメリカ」からの「逸脱」を巡る分析という性格を帯びることになったといえよう。

例えば、奴隷制擁護論の包括的研究として先駆的であったW・S・ジェンキンスの1935年の研究成果は、それ自体をアメリカにかつて存在した奴隷制社会、更にはそれが局在化したアンテベラム期南部社会の肯定論として読むことができる。奴隷制は人類史上において普遍的であり、アメリカで展開した奴隷制や

その肯定論も基本的にはヨーロッパ旧世界からの継承であるという著者の理解に、「旧世界」の遺産を背負わされた南部の悲劇という根本的な歴史認識を看取することは難しくない。もちろん、それを以って南部に無罪宣告を下すことがジェンキンスの目的ではない。むしろ彼の主眼は、旧世界から継承した奴隷制擁護論が、植民地期以来の論争を経て、1820年代には奴隷所有を「必要悪」から「積極善」へと捉え直す性格変化が生じる点に注目し、ここに南部奴隷制社会に独特の北部社会批判、即ち「自由な社会」に対する批判が込められている事実を再評価することに置かれているといえよう³⁰⁾。

他方、ジェンキンスと同じ1930年代には、例えばW・B・ヘッセルタインが、ヴァージニアを事例地域としつつ、奴隷制擁護論の南部白人内部における効能に注目した研究を発表している。それによれば、1830年代のヴァージニアに出現した奴隷制擁護論は、南部白人内部の階級差を隠ぺいする目的で、換言すれば、キャッシュのいう「原始ドーリア式因習」を白人全体に喚起する目的で唱えられたのであった³¹⁾。当時隆盛していた革新主義史学の影響を感じさせるヘッセルタインのこうした主張は、当然のことながら、ジェンキンスの理解と様々な点で食い違っている。しかしながら、ここで注目しておきたいことは、両者が同様の問題意識から出発している点である。不自由や依存を肯定する奴隷制擁護論の存在は、「アメリカ」からの「逸脱」を実証する材料に他ならず、この認識を前提として、奴隷制擁護論の歴史的評価を試みることに於いて、ジェンキンスとヘッセルタインの間には大した相違は見られない。自由や自立を称揚する「アメリカ的価値」と正面から相反する奴隷制擁護論は、一体如何なる経緯と目的で唱えられることになり、その存在はアメリカ史においてどのように

30) William Sumner Jenkins, *Pro-slavery Thought in the Old South* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1935).

31) William B. Hesseltine, "Some New Aspects of the Pro-slavery Argument," *Journal of Negro History*, XXI (1936), pp. 1-15. この他にも、こうしたアプローチを採用した当時の研究として次のものが挙げられる。Kenneth M. Stamp, "An Analysis of T. R. Dew's Review of the Debate in the Virginia Legislature," *Journal of Negro History*, XXVII (1942), pp. 380-87.

意味付けることができるのか。こうした問いについて、南部や南部白人をあくまで「アメリカ」の「外部」や「鏡」として位置付けた上で、彼らの議論は展開しているといつてよい。そしてこの傾向は、1950年代のリベラル・コンセンサス史観に至ってピークを迎えることになる。先に挙げた「『偉大な保守的反動』が一国民の精神に何らの衝撃を与えることなく死滅」したというハーツの「断罪」は、1950年代までのアメリカ史における南部の「疎外」を如実に物語っているといえよう。

しかしながら、先述したように、1960年代以降になると、現実社会における「南部のアメリカ化」や「アメリカの南部化」を背景として、南部史とアメリカ史の関係性に変化が見られるようになる。奴隷制擁護論を巡る研究動向についていえば、第一に、研究の射程が時間的にも空間的にも拡大した点が挙げられる。即ち、奴隷制擁護論については、植民地時代以来の経緯により力点が置かれるようになっただけでなく、従来は奴隷制廃止論の牙城と考えられていたニューイングランド地方を始めとする北部や中西部など、南部以外の様々な地域においても盛んに論じられていた事実が注目されるようになった。いうなれば、従来はアンテバラム期南部という特定の時期と地域に固有の「宿痼」と考えられがちであった奴隷制擁護論が、南北戦争期以前のアメリカ史全般に観察できる思想的傾向として見なされるようになったのである³²⁾。例えば、こうした研究動向を代表するL・E・タイズによれば、主に1820年代以降の南部で唱えられた奴隷制擁護論、わけでも「主人・奴隷」の主従関係を全面肯定する積極的な擁護論は、すでに18世紀までの西インド植民地やニューイングランド植民地、更にはイギリス本国において流通する、政治的もしくは宗教的に保守的な言論・言説の焼き直しに過ぎなかった。換言すれば、奴隷制擁護論はアメリカ的な思想からの逸脱ではなく、「アメリカ全土に広がる価値観、及びアメリカ社会の性格や特質の所産の一つ」であり、南部知識人による独自の貢献はほとんど確認することができないというのである³³⁾。先述した「南部史のアイロニー」それ自体のアイロニカルな展開をここに見出すことができるだろう。

ともあれ、こうしたタイズの議論の背景に、1970年代以降の初期アメリカ史

研究の動向が関係していることは、彼自身が認めていることである³⁴⁾。植民地期から19世紀前半までの初期アメリカ史研究では、1970年代になると、独立建国の思想と奴隷制の親和的な相互関係や、政治システムにおける奴隷所有者層の存在感を強調する研究が次々に発表される。E・モーガンやD・マクラウドらに代表されるこうした研究は、他方で南北戦争以前の政治システムにおける奴隷所有者層の影響 — 「奴隷主権力 (Slave Power)」 — を強調する D・M・ポッターや D・E・フェーレンバックらの研究と呼応する形で、やがて南北戦争以前の国家像を大きく書き換える土台を作り出すことになる³⁵⁾。今世紀に入って定着しつつあるかに見える、「奴隷所有共和国 (Slaveholding Republic)」というアンテベラム期の国家像の下では、もはや南部奴隷主階層の実態や彼らの世界観は、初期アメリカ史の核心を究明する上で、不可欠な研究対象となっ

32) 先に挙げたジェンキンスの研究にも共通するが、D・G・ファウストが指摘するように、こうした事実は以前から指摘されていたものの、必ずしも十分に注目されてこなかった。Drew Gilpin Faust, *The Ideology of Slavery: Proslavery Thought in the Antebellum South, 1830-1860* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981), p. 3. 奴隷制擁護論の起源を植民地期にまで遡る研究、また北部や西部における奴隷制擁護論に注目した研究として以下が挙げられる。Adelaide Avery Lyons, "The Religious Defense of Slavery in the North," *Trinity College Historical Papers*, XII (1919), pp. 5-34; Henry Clyde Hubbard, "Pro-Southern Influence in the Free West, 1840-1865," *Mississippi Valley Historical Review*, XX (1933), pp. 45-62; Howard C. Perkins, "The Defense of Slavery in the Northern Press on the Eve of Civil War," *Journal of Southern History*, IX (1943), pp. 501-31; Joel Silbey, "Pro-slavery Sentiment in Iowa, 1836-1861," *Iowa Journal of History*, LV (1957), pp. 289-318. おそらくこうした研究成果が1960年代前半まで重視されなかった背景として、北部の人種関係に注目した諸研究が、南部と北部の関係性の低さを強調していたことが挙げられる。代表的な研究として以下が挙げられる。Leon F. Litwack, *North of Slavery: The Negro in the Free States, 1790-1860* (Chicago: University of Chicago Press, 1961); Eugene H. Berwanger, *The Frontier against Slavery: Western Anti-Negro Prejudice and the Slavery Extension Controversy* (Urbana: University of Illinois Press, 1967).

33) Larry Edward Tise, *Proslavery: A History of the Defense of Slavery in America, 1701-1840* (Athens: University of Georgia Press, 1987) タイズは既に1970年代からこうした議論を展開していた。Tise, "Proslavery Ideology: A Social and Intellectual History of the Defense of Slavery in America, 1790-1840" (Ph. D. dissertation, University of North Carolina, 1975).

34) Tise, *Proslavery*, pp. 7-8.

ているといえよう。

1960年代以降の奴隸制擁護研究に見られるもう一つの傾向は、近年のこうした南部史を軸とした初期アメリカ史の書き換えの動きと無関係ではないように思われる。1960年代以降、先述のように第一の特徴として奴隸制擁護論の分析が時間的及び空間的な広がりを見せる一方で、第二の特徴として指摘できることは、様々な南部知識人が唱えた奴隸制擁護を巡る言論が、南部白人支配層の思想や世界観を考察する手掛かりとして、いわば批判的言説分析の対象となったことである。例えば、奴隸制史家のE・ジェノヴィーズはマルクス主義的アプローチによって、南部奴隸所有者階層のイデオロギーを特徴づける「前近代性」を強調したが、その際に主要な実証材料となったのが、ジョージ・フィッツヒューを中心とする南部知識人の言説であった³⁶⁾。他方、C・G・セラーズやR・E・モロウは、奴隸制擁護論が、南部奴隸所有者階層内のジレンマ、即ち奴隸所有を巡る思想上及び信仰上の矛盾を解消するための自己肯定論として機能したという議論を展開した³⁷⁾。この他にも、D・ドナルドは、19世紀前半の北部で起こった改革運動と南部の奴隸制擁護論との間に、「自由な社会」を批判する言説を巡って性質上の相似点があることを指摘した一方で、D・G・ファウストは、白人内部の階級格差が激しく識字率の低い南部において、一握

35) Edmund S. Morgan, *American Slavery, American Freedom: The Ordeal of Colonial Virginia* (New York: W. W. Norton & Co., 1975); Duncan J. MacLeod, *Slavery, Race, and the American Revolution* (London: Cambridge University Press, 1974); David M. Potter, *The Impending Crisis: America Before the Civil War: 1848-1861* (New York: Harper, 1976); Don E. Fehrenbacher, *The Dred Scott Case: Its Significance in American Politics and Law* (New York: Oxford University Press, 1978); Don E. Fehrenbacher *The Slaveholding Republic: An Account of the United States Government's Relations to Slavery* (Completed and Edited by Ward M. McAfee, New York: Oxford University Press, 2001).

36) Eugene Genovese, *The World the Slaveholders Made: Two Essays in Interpretation* (New York: Pantheon, 1969).

37) Charles G. Sellers, Jr., "The Travail of Slavery," in Charles G. Sellers (ed.), *The Southerner as American* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1960), pp. 40-71; Ralph E. Morrow, "The Proslavery Argument Revisited," *Mississippi Valley Historical Review*, XLVII (1961), pp. 79-94. なお、セラーズやモロウの議論は、フリーリングの南北対立の先鋭化を巡る議論にも影響を及ぼしている。William Freehling, *Prelude to Civil War: The Nullification Controversy in South Carolina, 1816-1836* (New York: Harper & Row, 1966).

りの教養層として孤立する南部知識人たちの精神世界を、彼らの奴隷制擁護や南部社会擁護を巡る言説から描き出した³⁸⁾。

ところで、こうした批判的言説研究の議論は、総じて南部奴隷制社会の特徴を描き出す点において、1950年代までの奴隷制擁護論を巡る議論と相似しているかに見える。しかしながら、両者の間には決定的な相違点があるといえよう。リベラル・コンセンサス史観までの議論において、奴隷制擁護論は「アメリカ」からの「逸脱」を実証する材料と見なされていたが故に、それを扱う研究者の筆致には少なからず「アメリカ的価値」に対する「贖罪」や「弁解」の意図を感じ取ることができたのに対して、批判的言説研究のアプローチによる議論では、当事者である南部知識人の人種・ジェンダー・階級を巡るイデオロギー性が次々に暴き出されるものの、それらは初期アメリカ合衆国の政治文化や南北対立の先鋭化を巡る理解や解釈の枠の中に首尾よく回収される印象が強い³⁹⁾。要するに、「南部のアメリカ化」と「アメリカの南部化」が進んだ1960年代を一つの画期として、奴隷制擁護論に対する研究当事者の心理的な「ディタッチメント」が進んだということであろう。例えば、ファウストなどによる1970年代の批判的言説研究では、南部知識人の閉鎖性や人種主義的思考の根深さが強調されるが、そうした議論は、1950年代までのように南部奴隷制社会の「特殊性」を際立たせることよりも、60年代における変革の波に疲れ、ヴェトナムでの敗北やウォーターゲート事件によって大国の自信を失い、全体的に保守化へと進む1970年代アメリカ社会への理解に接続するように思われる。

こうしたいわば「アメリカ現代史としてのアンテベラム期南部史研究」という理解は、1980年代以降のアメリカ社会の展開においてもなお適用可能である

38) David Donald, "The Proslavery Argument Reconsidered," *Journal of Southern History*, XXXVII (1971), pp. 3-18; Drew Gilpin Faust, *A Sacred Circle: The Dilemma of the Intellectual in the Old South, 1840-1860* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1977); Drew Gilpin Faust, "A Southern Stewardship: The Intellectual and Proslavery Argument," *American Quarterly*, XXXI (1979), pp. 63-80.

39) Ralph E. Morrow, "The Proslavery Argument Revisited," *Mississippi Valley Historical Review*, XLVII (1961), pp. 79-94; William Freehling, *Prelude to Civil War: The Nullification Controversy in South Carolina, 1816-1836* (New York: Harper & Row, 1966).

といえよう。1980年代から今日に至る情勢⁴⁰⁾について政治状況を中心に概観する時、特筆すべきは、財政悪化とグローバル競争の激化を背景に、政府の責任や機能が縮小され、社会の福祉や秩序の維持が地域や宗教をはじめとした各コミュニティに委ねられる傾向が強まった結果、所得格差の拡大や多文化主義へのバックラッシュを巡る不満や混乱が様々な形で露呈したことである。換言すれば、グローバルに拡大する資本の動きと論理に一国単位で抗うことが難しくなる中で、既存の政治システムの問題解決能力に対する人々の信頼性が低下し、結果として立場の左右を問わず、よりポピュリスティックな風潮が強まったということになる。

こうした時代環境は、先述した「奴隷所有共和国」という初期アメリカ合衆国を巡る歴史的理解の広がりとは無関係ではないように思われる。従来、19世紀前半の時代像は、「ジャクソンニアン・デモクラシー」や「市場革命 (Market Revolution)」などの説明概念に代表されるように、民主主義や市場経済の広がりを経験した一般民衆にとっての変革と変化の時代というイメージが強かった⁴¹⁾。これに対して、フェーレンバッカーやR・リチャーズなどは、連邦政治の舞台において少数派であるはずの南部奴隷主階級が、自らの権益に関連する連邦レベルでの政治決定に強い影響力 (Slave Power) を行使していた事実を

40) 対外的には、冷戦の崩壊から湾岸戦争を経て一旦は多国間協調主義へと向かうも、同時多発テロ事件を契機にユニラテリズム (単独行動主義) へ急速に傾斜した後、結局は対テロ戦争の対応に行き詰まることで、「世界の警察官」を自ら放棄する事態ことになった。他方、国内的には「レーガン=ブッシュ革命」の下でネオ・リベラル政策が実施されると同時に中絶論争や同性愛差別などの社会規範を巡って右傾化が進み、この傾向は、民主党クリントン政権を間に挟んで、2001年に就任したジョージ・W・ブッシュ大統領の下では「ネオ・コンサヴァティヴ」という名でより一層顕著となった。確かに、日系人のリドレス (名誉回復) や多文化主義教育の普及、また女性の地位向上や同性婚の合法化、更にはバラク・オバマがアフリカ系初の大統領に就任するなど、マイノリティの権利や社会的承認の拡大は進んだものの、ロサンゼルス暴動やBLM運動の発端ともなったレイシャル・プロファイリングの横行やアフターマティブ・アクション廃止の動き、また不法移民の取り締まり強化に見られるように、全体としてポリティカル・コレクトネスの行き詰まりや多文化主義へのバックラッシュが随所に見られ、これが近年のトランプ政権誕生の背景となっていることは周知の通りである。

重視する。要するに、白人成年男子普通選挙権の普及や市場革命の進展の一方で、奴隷主権力が牛耳る政治システムは硬直性を増し、これに対する賛否が奴隷制問題というポピュリストティックな問題に集約される形で南北対立の先鋭化を後押ししたというのである⁴²⁾。

加えて、こうした議論と近年の奴隷制研究の動向が親和的であることにも指摘しておきたい。E・ウィリアムズの先駆的研究以来、アメリカ大陸で展開した奴隷制の資本主義的性格は指摘されていたものの、今世紀に入り、方法論の洗練化や新たな史資料の発掘によって、その議論は飛躍的に精緻化が進んだといえよう⁴³⁾。スヴェン・ベッカートやロビン・ブラックバーンらによれば、アメリカ大陸に出現した奴隷制は、生産商品の選択、農場や奴隷の管理方法、奴隷所有者の経営マインドに至るまで、あらゆる点でグローバルな視野に基づいた資本主義的な性格を帯びており、この点でそれ以前の時代における奴隷制とは明確に一線を画すものであった⁴⁴⁾。アンテベラム期の連邦政治を支配した奴隷主権力は、かつてジェノヴィーズが描いたような「前近代」への強い執着心を持つ人々ではなく、近代的なグローバル資本主義の競争精神を強く内面化した人々であったのである。

当然のことながら、奴隷制擁護論や南部知識人を巡る近年の議論も、こうし

41) Arthur M. Schlesinger, *The Age of Jackson* (Boston, New York, London: Little, Brown and Company, 1945); Charles Sellers, *Market Revolution: Jacksonian America, 1815-1846* (New York: Oxford University Press, 1991); Sean Wilentz, *The Rise of American Democracy: Jefferson to Lincoln* (New York: W. W. Norton, 2005).

42) Don E. Fehrenbacher (2001); Leonard Richards, *Slave Power: The Free North and Southern Domination, 1780-1860* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2000).

43) Eric Williams, *Capitalism and Slavery* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1944) [山本伸監訳『資本主義と奴隷制』（明石書店、2004年）]

44) Sven Beckert, *Empire of Cotton: A Global History* (New York: Vintage Books, 2014); Robin Blackburn, *The Making of New World Slavery: From the Baroque to the Modern, 1492-1800* (New York: Verso, 1997); Robin Blackburn, *The Overthrow of Colonial Slavery: 1776-1848* (New York: Verso, 1998); Robin Blackburn, *The American Crucible: Slavery Emancipation and Human Rights* (New York: Verso, 2010); Sven Beckert and Seth Rockman ed., *Slavery's Capitalism: A New History of American Economic Development* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2016).

た「奴隷所有共和国」という国家像や資本主義化された奴隷制という理解をさらに補強する役割を果たしている。例えば、ジョン・マジェフスキーの議論では、とりわけ産業部門の多様化に積極的であった南部知識人の言論に注目し、彼らの政治経済学観が、客観的にはエリート主義という根本的な問題点を抱えながらも、主観的には奴隷制の維持・拡大と資本主義経済に基づく南部の発展が矛盾なく関係付けられていたことを強調している⁴⁵⁾。換言すれば、資本主義と民主主義は決して不可分ではなく、19世紀アメリカ史上においても経済システムと政治システムの整合を巡る選択可能性が存在したことが示唆される。またこのように、アンテベラム期南部奴隷州の動向を通じて、19世紀の国民国家形成過程における政治システムの流動性を検討するという観点から言えば、マニシャ・シンハによる、アンテベラム期のサウスカロライナ州における分離主義運動（secessionism）に注目した研究も興味深い。他の南部諸州と比較して、強固な奴隷主寡頭制支配が布かれるサウスカロライナ州では、北部で出現しつつあった「自由な社会」を仮想敵としながら、奴隷主権力を中心としたエリート専制主義的な政治システムが先鋭化の一途を辿り、南部奴隷州の連邦離脱を主導することになる。従来、連邦離脱の政治判断を巡っては、それが南部社会に独特の民主主義的かつ共和主義的な政治文化（herrenvolk democracy）の産物であるという解釈がなされてきたが⁴⁶⁾、サウスカロライナの事例を見る限り、19世紀西洋世界における民主化や「自由な社会」の潮流に対する「反動（counter）」として理解することが適切であるというのがシンハの主張である⁴⁷⁾。

45) John Majewski, *Modernizing a Slave economy: the Economic Vision of the Confederate Nation* (Chapel Hill: University North Carolina Press, 2009).

46) 連邦離脱の政治決定が、南部奴隷州によるジャクソン民主主義や第二次政党制の放棄ではなく、むしろそれらの南部的な成就のあり方であるとする研究については、以下のものが挙げられる。J. Mills Thornton III, *Politics and Power in a Slave Society: Alabama, 1800-1860* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1978); William J. Cooper Jr., *The South and the Politics of Slavery, 1828-1856* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1978); Lacy K. Ford, *Origins of Southern Radicalism: The South Carolina Upcountry 1800-1860* (New York: Oxford University Press, 1988).

47) Manisha Sinha, *The Counter-revolution of Slavery: Politics and Ideology in Antebellum South Carolina* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1999).

奴隷制擁護論を唱えた知識人や政治家の言説を実証材料として展開する彼女の議論から、専制的な政治文化と奴隷制が密接不可分な関係にあったことに加え、南北戦争前夜においてもなお奴隷制が将来を嘱望される制度であったことについて理解を深めることができる。

要するに、非民主的な政治文化は必ずしも資本主義とは矛盾しないという確信はアンテベラム期南部の白人支配層に共有されており、であるからこそ彼らは奴隷制を基盤とした政治経済に将来的展望を抱いていたということになる。こうした傾向の議論を、一国史を超えた地域史の枠組みでさらに深めようとする研究を最後に紹介しておこう。ロバート・ボナー、ブライアン・ショーン、そしてマシュー・カーブなどが展開する議論では、先述した「奴隷所有共和国」という初期アメリカ合衆国を巡る国家理解を前提としつつ、連邦政治を実質的に支配する奴隷主権力のヴィジョンが、国外において奴隷制が存続するカリブ諸島地域や南アメリカ地域を視野に納めた「帝国」の実現であり、そのためにアンテベラム期を通じて立法権、条約締結権、戦争権といった国家主権が幾度となく行使されたという理解を共有している⁴⁸⁾。またいずれの議論においても、綿花という当時最強の世界商品と連邦権力を後ろ盾に、奴隷主権力の帝国化の野望が膨張する経緯及びその具体像を、知識人や政治家の言説から描き出している。要するに、アンテベラム期の奴隷主権力が想定する近代国家アメリカ合衆国とは、民主化による人民主権の実質化とその範囲拡大を追求する「人民のための国家」ではなく、世界商品の生産・流通・販売に関わる一部の特権階層が、自らの権益拡大のために主権を恣意的に行行使することのできる国家であった。資本主義という経済のシステムは、いかなる政治システムと結びつくべきなのか。この問いが、やがて内戦へと至る19世紀アメリカ史における

48) Robert E. Bonner, *Mastering America: Southern Slaveholders and the Crisis of American Nationhood* (New York: Cambridge University Press, 2009); Brian Schoen, *The Fragile Fabric of Union: Cotton, Federal Politics, and the Global Origins of the Civil War* (Baltimore: Johns Hopkins University, 2009); Matthew Karp, *This Vast Southern Empire: Slaveholders at the Helm of American Foreign Policy* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2016).

南北対立の本質を説明する重要な問いであることに、近年のアンテベラム期南部史研究者の多くが同意しているように思われる。しかしながらその問題意識の根本に、経済のグローバル化に対する政治の模索が続く現代アメリカ社会の状況を見通すことは決して難しいことではないだろう。

おわりに

これまでの議論で明らかなように、ウッドワードの「南部史のアイロニー」を巡る議論が前提としていた1950年代までのアメリカを巡る状況は、その後の約半世紀間で大きく様変わりした。21世紀初頭の今日において、南部はもはやかつてのようなアメリカ合衆国の「後進地域」でもなければ、南部史はアメリカの「正史」を際立たせる役割を果たす「鏡」でもない。「南部のアメリカ化」や「アメリカの南部化」が指摘された1960年代から、南部と「アメリカ」との間でのある種の「同化」現象は現在に至るまで継続していると見ていいだろう。とはいえ、改めて強調しておきたいことは、こうした変化が「南部史のアイロニー」それ自体のアイロニカルな展開を引き起こしていった事実である。そしてそのことは、ある意味でウッドワードの慧眼を示すものでもあった。確かに、1960年代以降の南部がアメリカ社会における「特殊性」を解消してしまうことで、ウッドワードが言うところの「アイロニー」が機能するそもそもの条件を失ってしまったのかもしれない。しかしながら、その具体的なプロセスはパクス・アメリカナが黄昏を迎え始める時期の中で起こったが故に、例えばヴェトナムでの敗北や人種問題の行き詰まりなどの様々な問題を巡って内省に傾斜するアメリカに対して、南部史は実に多くの参照材料を提供することになったといえよう。これまで南部史の特殊性を彩ってきた事例が、改めてアメリカ史を再解釈する上での新たな視点や材料として注目を浴びることになったのである。ウッドワードは、敗北や屈辱、そして断絶の経験に裏打ちされた南部に独特の歴史感覚が、「成功と不敗」の伝説に凝り固まった北部をして正常な世界史の流れに近づけることができると考えていたが、その目論見はまさし

く現実のアメリカ社会が南部的な歴史感覚を身につけることで実現していったといえるかもしれない。

実際、1960年代以降のアメリカ研究を巡る状況、とりわけ植民地期から南北戦争以前の時代を扱う初期アメリカ史研究の状況を概観する限り、奴隷制に代表されるそれまで南部史という領域に閉じられていた「特殊性」が、新たに時代像を書き換える視点や材料となっていくことが分かる。先述した「奴隷所有共和国」というアンテベラム期の国家理解はその最たる例といえるが、その他にも、例えば植民地期研究においては、A・クリコフやJ・P・グリーンなどが、従来の「ピルグリム建国神話」を軸にした北部中心の時代理解（ニューイングランド＝ピューリタン中心史観）から、白人年季奉公人や南部奴隷制プランテーションを軸にした南部中心のそれへと大きく書き換えていった⁴⁹⁾。1960年代以降の南部史の再評価は、間違いなくアメリカ史研究全体へ大きなインパクトを及ぼしたといえよう。

ともあれ、本稿での議論を通じて改めて強調しておきたいことは、「アメリカ現代史としてのアンテベラム期南部史研究」という理解であろう。20世紀初頭の始まりから、21世紀の今日に至るまで、南部史研究は常に各時代の諸状況を反映し、またそれに制約される形で展開してきたといえる。であるならば、南部史が、かつてのように南部の「特殊性」を説明するためではなく、アメリカ合衆国に固有の歴史を説明するために注目されている現状をいかに意味づけることができるだろうか。ウッドワードの構想に沿って、それをアメリカ例外主義からの脱却を巡る一過程と見なすことや、近代国家アメリカの成熟を象徴する出来事として捉えることも可能であろう。しかしながら、少なくとも近年のアンテベラム期を巡る時代理解を見る限り、そうした「脱却」や「成熟」の

49) Allan Kulikoff, *Tabacco and Slaves: The Development of Southern Culture in the Chesapeake, 1680-1800* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1986); Jack P. Greene, *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1988). [大森雄太郎訳『幸福の追求 ― イギリス領植民地期アメリカの社会史 ―』（慶応義塾大学出版会、2013年）]

先にあるアメリカの姿に、「自由」や「人権」といったリベラルの価値を尊重し、国際社会に向けて訴えていく、かつてのアメリカを見通すことは難しい。アンテベラム期南部史が教えてくれるのは、奴隷制を基盤とした「支配 - 被支配」の政治文化が支配的であった国家が、グローバル資本主義の競争を勝ち抜くために、主権を自在に行使したという歴史的経験の所在である。こうした理解がアメリカ合衆国における歴史認識にどのような影響を及ぼすのかについて、今後も注視する必要があるだろう。